

悪の組織の雑用係 忙しくてクソガキを分からせている暇はねえ

黒月天星

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「クスクス。相変わらず地味々な事やってるねオジサン」

「げっ!? お前かよクソガキ」

悪の組織で働く雑用係。ケン・タチバナ。最近の悩みは仕事の多さと、何故か絡んでくるクソガキの対応。

見てろよメスガキムーブのクソガキめ。大人とはこういう事だ。

目次

悪の組織の雑用係 忙しくてクソガキを分からせている暇はねえ

1

連載版投稿のお知らせ

7

悪の組織の雑用係 忙しくてクソガキを分からせている暇はねえ

悪の組織。そう聞いて何を思い浮かべる？

メジャーな所で言ったら人間を改造して世界征服を狙う集団とか、邪神的な何かを呼び出して世界をぶっ壊そうとする集団とかそんな所だろう。まあ俺の所属する所はどっちかと言うと前者だな。

「……はあ……はあ。手こずらせやがって」

俺はケン・タチバナ。しがない悪の組織の一員だ。

今日も今日とて俺は厄介な敵と戦っていた。ようやく袋小路に追い込んだが、奴め俺の動きを見て隙を探していやがる。

いつもならあと一步の所で逃げられるのだが、

「だが、お前との戦いも今日これまでだ。俺には秘密兵器があるからな」

兵器課の奴に無理言って作ってもらった物を懐から取り出すと、それいつもいよいよ慌てだした。なりふり構わず俺の方に突撃して活路を開こうとするが、逃がしはしない。

「これで終わりだ。くたばりやがれえっ！」

俺は必殺の超強力殺虫剤を黒光りするGに浴びせかけた。

悪の組織と言っても所属する全員が戦闘員って訳じゃない。武器弾薬を造ったり調達する奴も居れば、アジトの整備をする技術者やメシを作る奴だっている。

これはそんな組織の中で働く雑用係、まあ俺の話だ。

「……ハ、ハハハハ！ 圧倒的じゃないかこのスプレーは！」

俺は一吹きで動かなくなったGを見て高笑いを挙げる。流星は兵器課特製殺虫剤。そこらの店で売ってる奴とは威力がダンチよ。

こいつら悪の組織にいるGだけあって、従来のGとは比較にならない生命力を持つているからな。並の殺虫剤では動きを止める事も難しい。バ○サン焚いた中で平然としていた時はどうしようかと思っただが、これでまた戦える。

動かなくなつたGを素早く紙に包んで封印。近くにもう居ないことを確認し、次の仕事に向かうべく振り返ると、

「クスクス。相変わらず地味くな事やってるねオジサン」

「げっ!? お前かよクソガキ」

そこに居たのは薄い水色の髪をツインテールにして壁に寄りかかる生意気なクソガキ……失礼。美少女だ。

こいつの名はネル。小学生のガキのような見た目だが、これでも本部の幹部候補生。つまり将来有望なエリート様だ。ネルは愛用の棒付きキャンデーをペロペロ舐めながらこちらを見て笑っている。

このクソガキ。何故かは知らんがちよこちよここちらに絡んでくるから困る。

「さっすが邪因子適性最低ランク。こんな仕事しかできないなんてカワイソカワイソ」

「へいへい。地味な上に最低ランクで悪うございましたね」

組織のメンバーは皆、邪因子という細胞を身体に持っている。これは組織に入ってから投与される奴も居れば、身体に入ったから組織に入る奴も居るな。

邪因子は首領の細胞をベースに造られたものらしく、宿主の肉体を急激に強化する。強化倍率は……そうだな。一般人が本気のパンチでコンクリの壁を砕けるくらいにはなるか。手が痛くなるが。

ちなみにこれは平均ランクの話。邪因子の量や活性化率、素体によってはもっと跳ね上がる。一定以上になると怪人化なんてものが出来るようになる奴も居るな。

ただそう旨い話はなく、量が多ければ多い程、活性化すればするほど首領に逆らえなくなる。以前上級幹部に話を聞く機会があったが、首領を見たり声を聴くだけで幸せな気持ちになつて逆らう気が無くなるのか。洗脳かな？

簡単に言えば邪因子とはドーピングにして首輪だ。

そして組織はごく一部の例外を除いて完全な実力主義。邪因子の適性次第では、こんな性格最悪のクソガキだろうが幹部候補生だ。

「ぶぶっ！　だ・け・ど、このいずれ幹部になるネル様は優しいから、そんなダメダメなオジサンにも手を差し伸べてあげるのです！

土下座して頭を下げるなら、幹部になった暁にはあたし専用の下僕に取り立ててあげるよ！」

実にクソガキらしい舐めた言い分だ。ここは一度大人としてそういった所を正してやるべきか。……だが、

「遠慮しとく。ほらどいたどいた！」

「……ちよっ!？」

俺はクソガキの誘いを華麗にスルーし次の仕事に向かう。大人はそもそも忙しい。さて次は部屋の掃除つと。サクサクやつちまわないな。

「ちよっと待ってよ!?　あたし専用だよ嬉しいでしょ?　……嬉しくないの?」

「お前さんみたいなクソガキの下についたら胃に穴が空きかねんだろ。ただでさえ仕事如山積みなんだから邪魔すんな」

憤慨して追っかけてくるクソガキに、俺はシッシと手を振ってやる。

以前掃除中に視察とかでやって来て、嗤いながらわざと水の入ったバケツをひっくり返しやがった事は忘れんからな。あと舐め終わったキャンデーの棒をよくそこらにポイ捨てしている事も。

……そう言えばそれらを注意してからだったか?　こうして絡んでくるようになったのは。逆恨みとは実に情けない。いずれそこらへんも含めて分からせてやるべきかもしれん。暇になったら。

「あたし幹部候補生なのよっ!　雑用係のオジサンなんかよりずっと偉いんだから!　力だっであたしが本気出したらオジサンもイチコロだよ!」

「偉かろうが強かろうが何だろうが、俺にとっちゃお前はただのクソガキだよ。悔しかったら実力よりも性格直してから出直しな」

「ムキッ！」

なんか後ろで地団駄踏んでるが気にしない。こっちは忙しいんだ。自慢するのはよそでやってな。

雑用係の仕事は多岐に渡る。

「助かったぜケン！ やっぱ月に一度はお前に頼まないとすぐにごちやつてなっちまう」

「トム。お前普段からずぼらなんだよ。もつと普段からマメに掃除しろ！ この戦闘服なんか最後に洗ったのいつだ？ カビ生えてんぞっ！ 同室のアランが気の毒だろうが」

ある時は同僚の部屋の掃除の手伝い。

「ありがとうよケン。お礼に明日のメニューはケンの分は特盛にしといてあげるよ」

「ちよつと晩飯の仕込みを手伝っただけで大げさだなオバチャン。だがあるがとよ。じゃあ明日は楽しみにしてる」

ある時は厨房の仕込みの手伝い。

「すみませんケンさん。本来なら整備班の仕事なんですが」

「丁度同じタイミングで本部からの機材導入があつちや仕方ないさ。千切れた配線の修理くらいなら俺でも出来るからな。それより見つらいからもう少しライトの光を当ててくれ」

またある時は壊れた電灯の修理等だ。

邪因子の適性が無い俺だが、こういうこまごまとした仕事なら得意技だ。さて、次はつと……。

「へえ〜。雑用係って意外と忙しいんだねえ。あたしはてつきりやる事ない人がぼ〜つと窓際の席に座って日がな一日過ごすだけの係かと思ってたよ」

また来たよこのクソガキ。今度は壁の手すりに器用に足を組んで座っている。ただ、

「そりやあ一つ賢くなって良かったな。それと……パンツ見えてんぞ」

一応防刃防弾耐火耐水その他諸々付いてはいるらしいが、それでも悪の組織なのにはスカートって舐めてんのかっ！ 見た目がアレなんで一応老婆心から忠告してやる。だというのに、

「え〜っ!? オジサン。いくらあたしが可愛いからってこくん小さい子のパンツに興味あるの？ ふふんっ！ このロリコンヘンタイオジサン！」

ネルはわざとらしくスカートを押さえ、そのまま見せつけるように足を組み替えてみせる。

おのれこのクソガキ。完全に舐めとるな。だがこういう手合いの対処法ぐらい知っているのが大人というものよ。即ち、

「はいはい。ロリコンでヘンタイでも良いから、さっさと手すりから降りてスカート直して回れ右しな」

真面目に付き合わない事。適当に受け流す事だ。

はっはっは。奴め。この対応は気に入らなかつたのか頬を膨らませていているな。

「というか毎度毎度。よく俺の所まで来る暇があるな。本部からここまで割と手間だし、幹部候補生なら訓練なりなんなりあるだろうに」
「……あたしくらい優秀な幹部候補生になると、訓練なんてすぐに終わっちゃうんだよ」

俺が呆れながらそう言うと、一瞬の間の後ネルはそう言ってクスクス笑う。

将来の幹部に必要な事。個人の邪因子適性は当然として、部下を率いる統率力や作戦立案力、その他諸々の事を本部で訓練するのが幹部候補生だ。

一般の戦闘員から徐々に実力をつけて幹部候補生になるのが普通だが、稀にそういう段階をすっ飛ばして最初から幹部候補生になる才能の塊みたいな奴が居る。目の前のクソガキはまさにそれだ。

「訓練が終わったんなら明日の分の準備でもしてな。それか……」

「仲の良い友達とでも遊べ」と言おうとして、組織にこいつと同年

代の奴はそう居ない事に思い当たる。ちよつとデリケートな話題になるかもしれない。

「それか？」

「あゝ……じゃあさつきと帰んな。自主練とか色々あるだろ？」

「……分かったよ」

どこかつまらなさそうにクソガキは渋々頷き、腰のホルダーから棒付きキャンデイーを取り出してそのまま去っていく。

……なんか悪い事をした気がするな。なので、

「おい！ やる事全部やってどうしても暇になったら……また来ても良いぞ。俺の仕事を手伝わせてやるから」

それは本当に何となく出た言葉。ついでに大人として子供に色々世間の厳しさを分からせてやろうと思つての言葉。

そして奴は振り返ると、

「ヤゝダよ！ そんな雑用なんて幹部候補生のあたしのやる事じゃないもの」

キャンデイーを口に咥えながら、そう笑つて言ったのだ。

やっぱ腹立つあのクソガキ！

連載版投稿のお知らせ

「ぐああああっ!？」

「そこまでっ！ 勝者。ネル・プロティ」

「……はあ。ヨツワ。自分の半分も生きてない子供にあっさりやられちゃって恥ずかしくないの？」

審判の終了の合図と共に、あたしは無様に吹き飛ばされて地を這う対戦相手に棒付きのキャンディーを手で弄びながらそう囁いかける。

「おい。見ろよ。またネルだぜ」

「ああ。アイツか。毎回訓練相手を半殺しにしてるっていうあの」

周囲からぼそぼそと陰口が聞こえてくる。

「いやあ流石流石！ ネル様にかかれればこのくらいチョチョイのチョイですよ！ まったく羨ましい」

「こちらタオルですネル様。どうぞ！ いやホントにお強い。これなら幹部もすぐですよすぐ！」

媚びへつらう様にあたしにタオルを渡してくる奴らもいる。

あたしの周りにはこんな奴ばかり。上は越えるべき壁だし、同格は虎視眈々と相手が不利になる粗を探している。下も媚び諂って良い思いをしようとする奴か、他の奴についてこちらを邪魔してくる奴らだ。

「……つまんないな」

「ほらほらっ！ こっちこっち！」

「このっ！ このおっ！ ちくしょうっ！ 何で当たらねえっ！」

わざと訓練の時相手を怒らせて、禁止されている邪因子による怪人化をさせてその攻撃を躲す遊びを試みたけれど、慣れてしまえばどれも紙一重で躲せるようになった。

あとで相手の人がこっぴどり絞られていたけど……どうでも良いか。

ああ。つまらない。

「クビっ!?! な、なんで」

「何でも何も、うくん……気分で?」

あたしの名を使って色々やってた取り巻きに「明日から着いてこなくて良いからね」と言ったら、なんかブツブツ言って顔が青ざめてた。これまで威張ってたどこかの誰かに仕返しされるのが急に怖くなったのかもしれない。

実際その二人はしばらく肩身の狭い思いをしたとか何とか。仕返しされないように自分が強くなればよかったのに。これは……何となく気分で作ってはみたけどあんまり楽しくなかった。

つまらない。つまらない。

あたしが雑用係のオジサンに初めて会ったのはそんな時の事だった。

「オジサン元気っ? ねえ聞いて聞いて! あたし昨日能力テストで自己新記録を出してお父様に褒められたんだ! なんでもこの齢でここまでの適性値は前代未聞なんだって! オジサンは……あつ! ゴメーン。オジサン適性最低ランクだったね! クスクス。……羨ましいでしょう!」

「ハ〜イオジサンっ! 相変わらず仏頂面で働いてるね。そんなオジサンに朗報ですっ! あたしこのキャンディー飽きちゃったからオジサンにあげるね! 美少女の食べかけのキャンディーだよお。感謝して犬みたいにペロペロしてよねっ!」

「オジサ〜ン」

これは、雑用係のオジサンと、幹部候補生の少女の、微妙に噛み合わない物語。